

論 文

20世紀前半ドイツ改革教育家の反戦文学

Antikriegstexte deutscher Reformpädagogen aus der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts

松村尚子・木内陽一*1・アンドレアス・ペーンケ*2

はじめに

20世紀末までには、人間の社会は合法的制度である戦争を廃絶しているにちがいない。

1897年にこの「20世紀への訴え」を書き留めたのは、オーストリア女性運動の闘士であったベルタ・フォン・ズットナー (Suttner, Berta von 1843-1914)¹⁾ である。時代的に限定されている面もあるが²⁾、ズットナーの考えにはヒューマニズム—人間は善を求める存在であるという人間賛歌—が現れている。

現在、戦争は諸民族にとってもはや「合法的制度」と称されるような政治の道具とは限らない。換言すれば、過去に世界的規模で起こった二つの悲惨な戦争が過不足なく証明したように、工業化・技術化された世界において戦争という手段では何も解決しない。それどころか、新しい問題を生じさせてしまう。両大戦の経験から言明できるのは、仮に第三次世界大戦が勃発したとしても、もはや何も得るものはなく、何も決着しないということだ。「戦争によっては、何もできない」という主張は今日大多数の人々の共感を得ることができよう。ベルトールト・ブレヒト (Brecht, Bertolt 1898-1956)³⁾ は、詩の中にこうした事態を書き記している。

偉大なカルタゴは、三回戦争をした

一回目はまだ大変強かった

二回目が終わってみると、まだ人が住めることが
わかった

三回目には消えうせていた

にもかかわらず、戦争を正当化するレトリックは常に存在してきた(現在も存在している)。第一次世界大戦当時に軍備拡張を正当化したのは、「浄化する鉄の稲妻 (reinigendes Stahlgewitter)」という常套句による。その後、本質的には同義である「予測可能な危険性」、「現代的な戦争」、「威嚇」、「軍備増強」といった、時代に即した常套句が用いられている。ヨーロッパ社会を概観すると、19世紀末には軍事的な破壊力が発展し、軍備の社会的な影響力が増大した。さらに諸国の相互関連が密接になり、それにより外交的に地域紛争を解決することが部分的に可能になった。他方で、先述の詩を想起するまでもなく、外交的努力としての戦争への懸念は20世紀ドイツおよびヨーロッパにも確かに存在しており、人道主義的観点において軍備の影響力を憂いた人々を中心に平和運動が国際的に展開していった。1901年にはこうした平和運動の流れを踏まえて、グラスゴーにおける第5回世界平和会議において、さまざまな関心—例えば軍備縮小、仲裁裁判所の可能性、国際裁判所、国際連盟—を包括して平和主義と呼ぶことが提唱された。「現代兵器の破壊力はこれまでの戦争における被害を何倍も上回る事態を引き出す」…それが当時なされた平和問題の学問的分析の結論だ

*1鳴門教育大学

*2グライフスヴァルト大学

った。そして軍国主義・軍備競争・世界戦争の危機、ヒューマンイズムの擁護が世界的な議論となったのである。

この議論を発展させるためには、現実をしっかりと見据えた人達が積極的に参加する必要があった。多くの分野の専門家たちも専門的な立場からこの動きに賛同した—第一次世界大戦の前夜に3つの大陸の41カ国の何千という医者が戦争の力に対して組織的な反対をしたことを思い起こしていただきたい—。こうした時代の流れの中で、ドイツの教育(学)者も平和の実現へ努力した。確かにそれは教員ないしは教育学者集団の中心的な位置を占めるものでなかったかもしれないが、それでも教育的な努力の中では重要であった。ドイツの改革教育運動個々の主唱者が望んだのは、自由、新しい軍備増強計画反対、平和の実現、武装放棄、戦争という暴力の追放、あらゆる民族の繁栄だった。

以上のことを踏まえつつ、本論ではこれまで東西ドイツの分裂状況によってその評価が不十分にしかなされてこなかった改革教育運動の牽引者ヴィルヘルム・ラムスツス(Lamszus, Wilhelm 1881-1965)ならびにヴァルドゥス・ネストラー(Nestler, Waldus 1887-1954)、フリッツ・ミュラー(Müller, Fritz 1887-1968)に着目し、各領域の専門家、教養市民層、社会運動、加えて独裁政権との狭間で尽力した彼らの成果を明らかにしたい。

1 第一次世界大戦に対する警告

20世紀初頭のドイツの教員たちの考え方の主流は、民族主義的・軍国主義的な傾向であった。当時皇帝であったヴィルヘルム2世(1859-1941)は、1889年民衆学校に対し社会民主主義者が目論む闘争に反対する組織として活動するよう命じていた。従って、民衆学校はその教育対象である労働者階層の子弟を監督する役割を担い、ひいては労働者階層の社会的活動を抑制する課題を背負っていたと言えよう。このような土壌もあり、学校生活に深く浸透してきた民族主義的で排外的な考え方に対して、ドイツの教員たちの多くは順応的で、無抵抗であった。従って、天職と平和のための

行動に対して節操を守った教師たちを思い起こすのは、教職に就く者にとって義務とも考えられよう。軍国主義的な社会背景に相まってなされた少年教育への危機感、軍備や増大しつつあった戦争の危機感から立ち上がった教員たちの闘いを考える際、とりわけハンブルクの学校改革者、ヴィルヘルム・ラムスツスによる1912年以後の諸活動を想起すべきであろう。作家ヴィリー・ブレーデル(Bredel, Willi 1901-1964)⁴⁾はラムスツスに師事した一人であったが、1955年に以下のように書いている。

20世紀初め、ドイツの著名な詩人たちではなく、単なる庶民、ひとりの小学校教師が戦争反対の最初の本を執筆した。ヴィルヘルム・ラムスツスがその人である。⁵⁾

ブレーデルはここで、ラムスツスが執筆し、政治的なスキャンダルをひきおこした『人間の屠殺場(Das Menschenschlachthaus. 1912¹⁾)』⁶⁾という芸術性の高い青少年文学を高く評価している。この反戦文学は、1912年夏にアルフレート・ヤンセン書店(ハンブルク・ベルリン)で編集されたものであり、著書の経歴の転換点になったものでもある。

1912年以前に既に反戦文学として知られていた著作には、ベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てろ』(1889年)、フランスの文豪エミール・ゾラ(Zola, Emile 1840-1902)の『開戦』(1892年)、ロシアの悲劇作家レオニート・アンドレイエフ(Andreev, Leonid Nikolaevich 1871-1919)⁷⁾『赤裸々な笑い』(1904年)が挙げられる。これらと並んで、ラムスツスの執筆した『人間の屠殺場』は、国際的レベルで文学的・芸術的に高い評価を得た著作であり、当時の排外的な戦争描写やそうした文学の流れに対して断固反対した著作であった。しかも後述するように広範にわたる読者の注目を集めたものである。ラムスツスは、自己の考え方やおかれた状況を考慮しつつ、青少年に平和のための教育をほどこすにはどうしたらよいかを考えた。1909年にドイツの宗教改革者として活動し、敗れて処

刑されたトーマス・ミュンツァー (Müntzer, Thomas 1489?-1525)⁸⁾ を題材とするドラマを処女出版した彼は、この経験に基づいて、芸術という手段が最も優れていると判断し、戦争の悲惨さを表現しようとした。『人間の屠殺場』というグロテスクでぞっとするタイトルに既に含まれている戦争描写こそ、ラムスツスにおいて初の反戦文学が有した比類無き重要な点である。この時期、第一次世界大戦のための軍備が進められ、戦争賛美や排外主義が際限なくひろまり、ドイツ大衆は雰囲気流されて、支配階層が押し進める戦争への道を何の抵抗もなく進んでいた。しかもドイツの教員の大部分は、この「悪政」を賛美し支持していた。1912年、31歳のラムスツスは、勇敢にも青少年文学という手段によって、戦争に夢中になっている人々を啓蒙し、戦争の真の帰結を示そうとした。

ラムスツスの反戦文学について特筆すべき点は、武器の技術的なレベルやその効果を熟知した上で記述しているということである。戦争を警告し、嫌悪をもよおさせる、という著者の意図は『人間の屠殺場』というタイトルに既にあらわれている。しかもこのタイトルは、精神的・物質的に戦争の準備が進められているただ中であって、明確な価値判断が示されている。ラムスツスは『人間の屠殺場』でドイツとフランスのあいだで戦争が勃発することを先取りして描いた。換言すれば、執筆当時にはまだ生じていなかったドイツとフランスとの戦争をフィクションとして提示したのである。もちろん、個人的な戦争経験を反芻し文学的に表現したものとして、アンリ・バルビュス (Barbusse, Henri 1873-1935)⁹⁾ の『砲火』、アーノルト・ツヴァイク (Zweig, Arnold 1882-1968)¹⁰⁾ の『ゼルガント・グリーシャ (Der Streit um den Sergeanten Grischa. 1927)』、ルートヴィッヒ・レン (Renn, Ludwig 1889-1979)¹¹⁾ の『戦争 (Krieg. 1929)』、エーリッヒ・マリア・レマルク (Remarque, Erich Maria 1898-1970)¹²⁾ の『西部戦線異状なし (Im Westen nichts Neues, 1929)』といったものが挙げられよう。ただし、これらの世界的に有名な著作は第一次世界大戦後になって初めて公刊されたが、ラムスツスはこれらの第一次世界大戦後

に書かれた反戦文学を既に先取りしていたことになる。

民族主義によって導かれる人種抹殺、あるいは〈民族の自殺〉というラムスツスの恐るべきヴィジョンは、残忍な場面の細かい描写や、息をのむような場面展開、そしてとぎれとぎれの語り方から生じるものである。彼は短く要点のみ表現するように心掛けている。要点は名詞を並べることによって、一目瞭然に理解できる。主人公の姿は、事件の中心に位置しているがゆえに、体験を直接伝えることができる。語る自己の姿が陰鬱で倒錯していることは、著者の考えた戦争の無意味さを同じように直接的に訴えている。英雄が示しているのは、軍国主義によって戦争の真の原因と現実を隠蔽された若者の悲惨な経験であり、さらに人々を殺害することの無意味さの自覚である。「非人間的な戦闘を、血のしたたるように、そして鬼気迫るように描くことによって」ラムスツスは人が一目見ただけで震え上がるような啓蒙的な作品を作り上げた。芸術という手段は、将来生じうる事柄を、あらかじめ目に見えるかたちで提示することができる。それゆえ通常では想像しがたいような苦痛を他人に伝えることができるのである。この著作でとりわけ意を用いているのは、感情に訴えるような描写を用いて恐怖を表現することや、愛に反するもの、反理性的なものを前面に押し出すことである。ラムスツスの幻想に満ちた表現は同時代の印象主義のそれと関連をもっている。そこで『人間の屠殺場』に収められた散文詩「敵は何か? (Was ist ein Feind?)」に着目したい。

敵は何か?

私の前に立っているのは、一体誰だ? 私が撃とうとしている者は?

敵か? 何が一体敵なのだ?

気がつくとき持ちの良い休暇の朝に私はフランスの停車場をまた眺めている。そう、また窓の外を好奇心に急かされて眺めている。知らない国、知らない人達。出発の時がくる。もう駅のマイクが

出発を知らせている。そのとき年老いた老婆が窓に向かって震える手をさしだす。私たちとともに旅立つ若さに輝かんばかりの青年が、しわのよった手を取り愛撫する。老婆は何も言わない、頬に涙がつたう。ただ、その青年を見つめるだけだ。彼も老母を見つめかえている。すると何かが私に啓示のようにひらめいた。フランス人も泣くことがあるのだ、と。私たちと全く同じだ。フランス人も別れるときは泣くものなのだ。フランス人もたがいに愛し合い、悲しむ。…そして汽車が駅から走りだしても、私はずっと窓の外を見ていた。かの老婆は駅に取り残され、身動き一つせず列車を見送っている。そのとき私は、私のかけがえの無い母をおもわずにはいられなかった。それ、別れを告げていた者は、私自身であり、そこでプラットホームで泣いていたのは私の可哀想な年老いた母だったのだ。無数のハンカチが風に揺れていた。掌が振られ、私も掌を振りかえしていた。なぜなら、私は彼女の息子の一人だったから…そして私はまた物思いに耽り、窓ガラスのまん中に狙いを定めた。

私はもはや思い煩うことはあるまい。窓ガラスは私の方に近寄ってきたように思えた。不意に、青色で描かれた像がその白い四角形からあらわれたように私には思われる。私はじっと見つめる。私は眼前にある姿を目の当たりにする。私はドアノブに手をかけ、銃の引き金に指をかけた。何故に私はやり遂げないのか？ 指は震えていた…今！ 今だ！ 私はその顔を知っている。それはナンシーから来た若い男、母親と別れてきた男だ。そのとき銃身がバネのように動き、私はぎよっとした。と言うのも、…私は生きていた顔に発砲したからだ。殺人！殺人だ！ お前は母親に向かってその一人息子を銃殺したのだ！ お前は兄弟殺人者だ！¹³⁾

ここで用いられた最後の言葉「兄弟殺人者

(Brudermörder)」という語そのものがドイツ人にとっては衝撃を与えるものである。「兄弟」という語には単に血縁関係を指すものではなく、むしろ同一の文化・思考形式を共有する人類という意味が大きい。人間の善性を信頼する立場にあった人々にとって、この詩は戦争とはまさしく自らと同質である人々を殺すというものだという事象に直面させるものであったと言えよう。

ラムスツスのこうした叙述スタイルを支える信念は子ども達の創造的な能動性を前提とするものである。実際、彼の教育活動に鑑みると、民衆学校におけるドグマ的かつ形式的な教授は、権力支配維持の一装置としてなされてきたものと看做していたことがうかがえる。1910年同僚のイェンセン (Jensen, Adorf 1878-1965) との共著で出版した『我々の学校作文は偽装された低級な読み物である - 国民学校およびギムナジウム向けドイツ学校作文の新たな確立への探究 (Unser Schulaufsatz ein verkappter Schundliterat. Ein Versuch zur Neugründung des deutschen Schulaufsatzes für Volksschule und Gymnasium. Hamburg 1910)』において、彼らは形式的教授の代表とみなされていたヘルバルト主義者等が推進したいわゆる「定型作文」の対極に生活結合と子どもに適合する素材を重視する「自由作文」を定置し、後者の活動を重視した。その「自由作文」活動の基底には子どもの感受性および能動性が前提とされていたのである。従って、ラムスツスの叙述スタイルは、戦争というヴィジョンを当時としては「無定形」で「自由」なスタイルで記述することこそ子ども達にもっとも強烈な刺激をもたらすこと、さらにその記述の中に強烈なヴィジョンと現実生活との交差・循環を見出すことを意識して成立したものである。そしてその叙述スタイルは、叙述からのヴィジョンによって子ども自身も「作文」という活動へと促され、またその他の子どもへもその営みを促すことへと繋がるという教育的な観点を有するものであったと考えられよう。

『人間の屠殺場』は大きな反響を呼び、3カ月後にはドイツで10万冊を売りさばき、翌1913年には英語版

が出版され、それも10万冊販売された。この本は全部で7カ国語に訳された。この翻訳そのものが非常に重要であるとの認識の広まりは、各国の著述家らによって序文が付されていることから明らかである。フランス語版にはアンリ・バルピュスが、デンマーク語版には『勝利者ペレ』(1906-1910年執筆)で有名になった小説家マルティン・アンデルセン・ネクセ(Nexø, Martin Andersen 1869-1954)が、ドイツ語版には高名なジャーナリストであったカール・フォン・オスィーツキー(Ossietsky, Carl von 1889-1933)が序文を寄せたのだった。

ラムスツスの『人間の屠殺場』は、実際、平和運動に活用された。例えば、社会民主主義的な新聞である『ハンブルク・エコー』は、ラムスツスの著書の要約を文芸欄で紹介し、この反戦文学への関心を呼び起こした。社会民主主義の理論誌である『新時代(Neue Zeit)』では、『人間の屠殺場』の詳しい書評が載った。

戦争の残忍性を色とりどりのコラージュで表現し、排外主義をあぶり出している。この本は、すべての労働者協会の文庫に収められるべきである。¹⁴⁾

全くこの文脈において喜ばしいことに、1913年イェナでの社会民主党の幹部会のレポートが次のような事実を伝えている。「よく知られた著作であるラムスツスの『人間の屠殺場』は、内容は原著そのままの版を30ペニヒという廉価版(元版は1マルク)にして2万部印刷した。」¹⁵⁾

『人間の屠殺場』を革切りに、ヴィルヘルム・ラムスツスは逸早く平和の実現へと活動を開始したが、彼がさらされた反対勢力からの迫害のひどさも忘れることができない。反対勢力がこうした影響力の大きい反戦文学に対し手をこまねいて見ている訳がなかったのは当然である。政府もまた、ラムスツスの反戦思想は無視することはできなかった。政府の見解に従えば、ラムスツスは反愛国主義者であり、彼およびラムスツ

スの同調者は全力で取り締まられてしかるべきと考えられた。

愛国者はこの本を読んだときに憤りを感じずであろう。なぜならドイツ民族の勇敢さや英雄的な精神をだいなしにしているから。¹⁶⁾

ここに取り上げた見解は、当時のドイツ国内では平和主義的な主張は即ドイツ「民族(Volk)」およびドイツ「国民(Nation)」を蔑ろにするものと受けとめたものと考えられる。

ラムスツスの『人間の屠殺場』が非常な反響を呼んだことは、メルケルとリヒターによってハンブルク警察の書類から発見され、ヴィルヘルム・ラムスツスの生誕百年を記念して出版された『人間の屠殺場』のリプリント版¹⁷⁾にも紹介されている通りである。教育委員会もまた黙殺しなかった。ヴィルヘルム時代のドイツの教員は、教え子を兵士とする心構えをもち、皇帝と祖国に対して柔順な人間へと教育しなければならなかった。当然のことながらラムスツスの反戦思想は処分の対象となり、その著書は発禁処分とされ、彼自身は教職から追放された。

1914年8月以降の出来事、すなわちフランスとの開戦、ヨーロッパ全土を巻き込んだ戦争について、1962年にラムスツスは「私の考えた悲惨な情景を事実はずっと凌駕してしまっていた」¹⁸⁾と述べている。『人間の屠殺場』は1915年の初めには発禁となり、図書館からは押収された。動員がかかると、ラムスツスはすぐに召集令状を受け取った。反戦文学者を最前線に送り込もうというわけだ。もっとも、ラムスツスは前線への派遣を免れることができた。後方で一年間の兵役だけで、あとはハンブルクにとどまることができたのである。それでもなお、彼の眼前で大きく変貌し、全く新しい経験である20世紀の戦争というものに、ラムスツスが文学的にどのように対応したのかということは、注目に値する。

2 第二次世界大戦に対する警告

(1) ラムスツスの警告

ラムスツスの芸術作品が時代に即応したものであるということは、毒ガスを使った戦争に反対しているという点で特に明瞭になる。

1915年4月22日、化学兵器による大量虐殺の時代が始まった。ドイツの軍団が、ベルギーの都市イペルで猛毒の塩素ガスを使用したのである。100万の兵士がガスの犠牲となり、9万1千人の兵士が死亡したことが、この化学兵器による最初の戦争の悲劇的な結末だった。この時以来、ますます強力な毒ガスが製造されるようになってきた。

平和を求める運動の成果として、生物化学兵器そのものが1925年のジュネーブ議定書で取り上げられ、戦争での使用が禁止されたことは特筆されねばならない。そして、改革教育運動の担い手も生物化学兵器禁止のための戦いを支援した人たちであったことを忘れてはならない。ラムスツスもまたイペルの悲劇十年の記念に演劇「毒ガス-死の舞踏二幕と三つの夢想 (Giftgas-Ein Totentanz in zwei Aufzügen un der Traumbildern)」をハンブルク学生組合連合の委嘱で上梓した。この劇では毒ガスの発明者が主役であり、毒ガスの発明が「祖国を世界の征服者とする」内容となっている。『ハンブルク・エコー』はこの劇の初演が大成功を収めたと報じている¹⁹⁾。

その上梓の3年後にあたる1928年という年は、ラムスツスにとって化学兵器のない世界を訴える契機となった年である。同年5月20日、ハンブルク港のシュトルツェンベルク社の敷地にてホスゲンガスの入ったタンクが爆発した。このガスは第一次大戦時に使用されたときには、「黄色い十字架」といわれたものである。この爆発で12人が死亡し、200人以上の人が負傷した。この事故から明らかになったことは、国際法上禁止されているにもかかわらず、ドイツで毒ガスが製造されていることだった。このホスゲンガスの事故は戦争準備に反対する平和運動の活性化の大きなきっかけだった。この悲劇に衝撃を受けて、ラムスツスは『人間の

屠殺場』(第72版、ライプツィヒ刊)において改めて時代に即応した序文を書き下ろした。この序文でも彼らしい方法で、化学兵器による大量殺人に対してあらゆる点から反対している。「諸民族のために演じられる軍備縮小劇は、古くなった方法と関係を断ち、役に立たなくなった兵器を博物館へならべる、ということだ」²⁰⁾と。また、軍事技術の発展をラムスツスは憂慮している。「ガス弾や焼夷弾の飛行大隊や手榴弾が開発されている。科学者は大量のバクテリアを、ペストやコレラの散布のために育てている」²¹⁾。

(2) ネストラーの警告

1929年に生じた世界的な経済恐慌は、1931年に最悪の事態をむかえた。それはワイマール共和国の民主主義を危機にさらし、社会の右傾化を促した。こうした状況で、ライプツィヒの改革教育者ヴァルドゥス・ネストラーは、国際平和協会の会員として化学兵器批判の作品を発表した。ネストラーは1919年以来、世界的によく知られたガウディヒ・シューレ²²⁾で教えていたのである。ネストラーは毒ガス防御師団で苛酷な勤務をしていたので、その経験に基づいてわかりやすい叙述をしている。まずネストラーは化学兵器戦の歴史的発展について述べている。そして次に、生物化学兵器に対して有効な防御手段があるのだ、という戦争遂行者の立場に反論している。

生物化学兵器など恐れることはない、と楽観視している人たちこそ我々の安全を脅かしているのだ。なぜなら、馬鹿げた怠け心で我々を油断させているからだ。そして危機意識を妨げてしまい、有効な対応を不可能にするのだ。諸民族よ、団結せよ、そうすればだれも脅かしはしない。²³⁾

ネストラーの結論は以下の通りである。「防御する可能性はただひとつ。戦争挑発者を早急に封じ込めることだ」²⁴⁾。キリスト教的社会主義者ネストラーは、戦争に反対するドイツ平和協会から毒ガスに関する彼の研究を出版する機会を得た。こうして彼は国際平和協

会が1926年8月にオーバーアマガウで開いた国際集会の課題と取り組んだことになる。すなわち国際平和協会の軍備縮小委員会は、未来の毒ガス戦の本当の姿をあらゆる民族に広く啓蒙することを要求したのである。ネストラーは反戦の著書をもって、平和や民族の相互理解、平和共存のために国の内外で講演した。講演は常に、社会的人間は平和実現の力と可能性をもっているという情熱的な訴えをもって締めくくられていた。こうした姿勢は彼の散文詩「ドイツを覆う毒ガス(Giftgas über Deutschland)」にも顕著にみられる。

政治家、民衆指導者よ、お前達は自らを恥じないのか？

お前達は誰のために配慮せねばならない？ 「祖国」の鉄兜団についての「利害」か、あるいは武器産業や抵抗思想の繁栄に関心のない数百万の大衆か？ ゴム張り部屋にいる数ダースの犯罪者および精神錯乱者らを閉じ込めるかわりに、お前達は国民全員にゴム製の服をあてがうのか！ 数名の賭博師が人間社会の船を脅かしている。奴等の悪行を矯正するかわりに、お前達はむしろ種族・女性・子ども諸共乗組員全員をコルク屑とゴムの輪の中に－それこそ世界の大海原の中に！－ぶち込んで、奴等を保護することによって奴等とお前達は安穩としているのだからな!!

兵士達よ、お前達は自らを恥じないのか？

これまでにもお前達は勇敢なる悪行を訓練してきたと信じていよう。今やお前達は死の産業従事者へと、満足ゆく「宮中狩猟官(Kammerjägers: 害虫駆除消毒業者の意もあり)」へとなりつつある。さあ、兵士等よ、路上で子どもと遊ぶのだ！ お前はその子を殺したいかい？ もちろんその気はないだろうよ、けれどもお前の男の名誉に逆らって無防備な子どもと、子どもと一緒に100キロメートル離れた場所にいる多くの人々をガスで苦し

め、死に至らせることはないだろうね？²⁵⁾

ネストラーは政治家や兵士のみならず、学術研究者や教師、母親、キリスト教信者、社会主義者、人間全体に毒ガスという技術、戦争という社会的技術を行使した場合何がもたらされるのか、その帰結は何であるかを訴えかけた。そして看過してはならないことに、彼は学術研究者をはじめとする銃後の人々もまた、戦争加担者であることを喚起させようとした。散文詩「ドイツを覆う毒ガス」は以下の言葉で締めくくられている。

我々の手には「人間の尊厳」が与えられている。我々のものであるその「人間の尊厳」の背後には愛される人間の声が響いている。その声は昨日、鋼鉄の雷雨から密かに逃れて我々に呼び掛けていた。我々のものであるかの「人間の尊厳」から、明日にはガスと炎のなかに助けなく溺れてゆくであろう子どもがいるではないか。さあ始めようではないか、仲間の皆さん！ 私達は将来それを成し遂げるのか？

否なり－私達が疑い、問いかけている限りは。
是なり－私達がとりもなおさずあらゆる信頼とあらゆる意志とを担保にし、あらゆる間違った寛容さと人間の成果を放棄し、－そして行動するときには。²⁶⁾

3 ナチス政権下における平和教育者の活躍－ミュラーの努力

ナチスの権力掌握の直後でもネストラーは勇気をもって、著作と講演を通じて平和教育の活動をした。例えば、1933年2月2日のライブツィヒ教員組合の集会で、「防空－われわれの教育課題」というテーマで講演した²⁷⁾。

ネストラーと同様、この時期にヴィルヘルム・ラムスツスは反戦の著書を執筆し、爆弾投下で大都市が破壊されていく様を描きだした。ラムスツスは、この本の最後の部分で節操のない権力者に反対して、平和を

創り出す力について述べた。ラムスツスはしかし出版社を見い出すことができなかった。ヒトラーの権力掌握の直後、彼はカール・フォン・オスィーツキーに手稿のコピーを送り、同時に「この本の章のうちいくつかでもよいから『ヴェルトビューネ (Weltwühne)』誌²⁸⁾で発表してほしい」と提案したが、「私のお願いは遅すぎた。そのあとすぐにオスィーツキーは、逮捕されて強制収容所につれさられたのである」²⁹⁾。

ナチスの時代が始まるとともに、大きな影響力を有する反戦文学者であったヴィルヘルム・ラムスツスも、またヴァルドゥス・ネストラも、その宗教的・平和主義の考え方ゆえに、悪名高き公務員再雇用法(1933年4月7日)によって処罰された。同じことはケムニッツの改革教育者フリッツ・ミュラーにも起こった。ミュラーは実験学校の教員として、学年を越えた授業-10学年を統合した授業-によって改革教育の信奉者のなかでセンセーションを巻き起こした人物であった³⁰⁾。ミュラーは、友人の社会教育学者シャッター(Schatter, Kurt 1881 - 1962)とともに-ゲシュタポに気づかれないように-、カール・フリードリヒ・ゲルデラー(Goerdeler, Kurt Friedrich)の仲間に加わっていた。このゲルデラーは1930年から1937年までライプツィヒの市長を勤めた人物であり、失敗はしたが、1944年7月20日のヒトラー暗殺計画の主たる立役者の一人であった。ゲルデラーは新しい政府の宰相になることが予定されていたのである。ゲルデラーは事件後、逮捕され死刑の判決を受けた。シャッターはゲルデラーの幫助、そして国家に対する反逆という罪で1944年9月に一年間の禁固を言い渡された。ミュラーのほうは、しばらく後にアメリカに逃亡した。

ミュラーはといえば、反戦文学を出版したことはなかったが、20年以上にわたって青少年グループのリーダーをしていた。このグループは、ナチス=ドイツの時代に平和教育の立場から非合法に活動していた。ミュラーはそこで若者達と反戦文学のテキストを議論していたのである。また、彼は第二次世界大戦の間、戦争に動員された当時の実験学校の生徒や青少年グループの多くと文通していた。ミュラーのように、平和と

民族融和の主張者として、少なからぬ数の教師が活発に活動していた。

次の詩は、フリッツ・ミュラーが1944年の夏、かつての教え子であったアルフレート・フィヒトナー(1914年生まれ)に送ったものである。フィヒトナーは、第二次大戦中、フランスのMaisons-Lafitteに情報担当軍曹として駐留していたのである。フィヒトナーは以前ミュラーに対して次のように戦時郵便で伝えていた。パリ郊外で子どもに出会った、その子は砂遊びで汚れた手を挨拶に差し出したがフィヒトナーはその素振りを無視した、すると母親がその子を引っ張っていった、と。折り返しフィヒトナーはミュラーから韻をふんだ詩の形式による忠告「子どもの手に寄せて(Um eine Kinderhand)」を受け取った。それは次のように締めくくられている。

子どもが出来事において意味を持つ限り、
子どもは天真爛漫であると理解することをお前は
注意しておかなければ！
全てを真剣に受けとめるのだよ、そうすれば全て
は全く小さなものではないに違いないのだから。
お前が屈服したあちらの手に一発殴りつけたまえ！
いつまでも変わりなく心を持っていておくれ、私
の親愛なる仲間である君は！³¹⁾

フリッツ・ミュラーは人間的な関心事を詩的に表現している。このことは、1944年のナチスの統治下では大変危険なことであった。彼の立場は当時の状況では(ナチスに対し)「敵対的」な人々と「同質」のものとして理解され得るものであった。彼は受け手から信頼されていたにちがいない。受け手から密告されたとしたら、悲惨な結果になっていたに違いない。

4 第三次世界大戦、原子力の地獄である最終戦に対する警告

人間性に対する新しい種類の脅威は、アメリカ、ニューメキシコ州のアラモゴルドの砂漠におけるブルト

ニウム爆弾の最初のテスト（1945年7月16日）から始まった。このテストは原子力時代が始まり、新しい破壊の力に人類が曝されていることに警鐘を鳴らしたのである。また二つの異なったタイプの爆弾が造られたので、二回の「現実の条件」のもとでのテストが行われることになった。二つの都市が破滅の対象となった。つまり広島と長崎である。

1945年8月5日から6日にかけての夜、太平洋マリアナ諸島にあるテナンの空軍基地では集中的に作業が行われていた。アメリカ軍の509特別隊は、ドームステイ計画の準備に追われていた。爆撃機の乗組員がそろってから、ウィリアム・B・ドニー牧師が祈りを捧げ神の加護を祈った。この特別部隊の指揮官であるパウル・ティベツ大佐はその5日前に命令を受け取っていた。その命令によれば、1945年8月6日、B29エノラゲイから日本の第八の都市である広島に原子爆弾を投下せよ、というものだった。広島はそれまでアメリカ軍の空襲を免れていたのである。東京時間で8時15分、広島の上空500メートルのところでは5キロのウラン爆弾リトル・ボーイが爆発した。爆発の威力は、通常の爆弾の2000キロのあたりのものだった。30万人の広島住民のうち、14万人以上が死亡し、7万人が負傷した。生き残った者も放射能のために死にゆく運命にあった。そして8月9日には再びB29が飛来した。乗組員は、第一目標の小倉が曇りのため爆弾投下をあきらめて、第二目標の長崎（人口30万）に向かった。昼頃（11時02分）、目標の上空550メートルの高さで爆弾が爆発した。9000度の熱で大火災が起こった。7万人の人間が死亡し、10万人以上の人間が負傷した。それ以来、毎年放射能の後遺症で何千人もの人が死亡し、また長期の療養をしている。当時、アメリカ国防省は、12個の原子爆弾の投下を計画し、また毒ガスの使用も準備していた。しかしこの新しい大量殺戮兵器の製造は大変に労力がかかるので、1945年の8月には、皮肉にも幸運なことにまだ二つの原子爆弾が製造されたにすぎなかった。

私たちは1945年以来核兵器がどのように「改良」されてきたか、水素爆弾から中性子爆弾へというように、

質的にどのように変わってきたかを知っている。また、こうした殺戮兵器がさらに強力になりつつあることも周知の通りである。1945年以来、世界で10万の核弾頭が製造された。そのうち2000が試験として使用され、爆発した。今日でも4万5000を数える核弾頭がロシア、ウクライナ、カザフスタン、USA、フランス、イギリス、中国、インド、パキスタンの兵器庫に貯蔵されている。核兵器の保有が疑われるのは、イスラエル、イラン、北朝鮮である。健康や環境に対する核兵器の影響について調査するため専門家によって国際的な委員会、すなわち反核医学者委員会とエネルギー・環境研究所が組織されている。そこで明らかにされたことは、1980年までに大気圏で行われた核実験によって、2000年までに約43万人のガン患者が現れるということであった。また、地下核実験によって、500万キュリーのストロンチウム、800万キュリー以上のセシウム137、20万キュリー以上のプルトニウム239が蓄積されていることも事実である。この大きな大量殺戮兵器の山から私たちは降りることはできない。全ての核兵器の完全な廃絶という努力目標を掲げたとしても、せいぜい長い道のりのうち、ほんの少し山を下ることができるだけである。

この大量殺戮兵器が示している技術の悲劇に対し、責任感の強い作家は広島と長崎への原爆投下を彼らの文学のテーマとした。原爆の破壊と影響に対する最初の大きな文学的プロテストは、1946年にアメリカで出版されたジョン・ハーシー（Hersey, John Richard 1914-）の「ヒロシマ」であった。同じ年にヴィルヘルム・ラムスツスの散文「学者と死（Der Forscher und der Tod）」が公表された。これは彼のアンソロジー『死の大舞踏（Der große Totentanz）』の一部であった。このアンソロジーの大部分は、執筆と出版を禁止されたナチ時代に準備されたものである。

ひっそりと、研究室は夜の暗闇にみだされた公園の中に打ち捨てられている。ただ、側室の一室にはなおも灯りがともっている。あそこにただひとり、多岐にわたる研究構想をその懐に抱いてきた

がらんとした建物へと帰ってきた学者がいる。彼は長年取り組んできた研究成果を示す化学式やなにやりに覆い尽くされた長机の前に座っている。彼の成果はコンツェルンのコスト削減に寄与するはずだったのだが、彼はそのコンツェルンと本日の午後関係を絶たざるを得なかった。けれども、コンツェルンに提案された契約に署名するかわりに、彼はこれまで委任状をもらっていたコミッション、大いに慌てていたコミッションがあれこれ費やす時間に力をすっかりそがれてしまった。彼のこれまでの技術をすっかり革新させる発見によって何が生じるであろうか—もし、コミッション達にその技術を手渡してしまうなら？この問いは最後の瞬間彼をひるませたのだった。そして輝かしい成果からくる喜びをかなぐり捨てさせる密やかな戦慄が、今夜も彼を決して安心させなかったのである…³²⁾

ここでラムスツスが問題としているのは、科学技術の革命的進歩という現実を見据えて、学者は社会に対してどのような責任を持つか、ということである。つまり科学的発見に対する科学者の責任如何ということである。ヒューマニズムあふれる責任感に裏打ちされたこの反戦文学において、ラムスツスは—原子爆弾の投下に触発されて—世界を焼く新たな劫火、原子爆弾による破壊に警鐘を鳴らしている。

高名な著述家等も沈黙していなかった。プレヒトもまた原子爆弾の出現を見て、『ガリレイの生涯』を改訂することを考えた。ガリレオの自責の念、自己省察はさらに詳細に叙述された。後にはデュレンマツト (Dürrenmatt, Friedrich 1921-1990) が『物理学者 (Die Physiker)』で、キップハルト (Kipphardt, Heinar 1922-1982) が『ロベルト・オッペンハイマーのこと (In der Sache J. Robert Oppenheimer)』で同じ問題を取り上げた。デュレンマツトは人類の破壊につながる新発見をした物理学者を主人公に据え、新発見を隠すために自ら精神病院に入院するも、結局新発見は公のものになってしまう悲喜劇を提示した。キップハルトはさら

に実在の人物、第二次世界大戦中原子爆弾の完成を指導し「原爆の父」と呼ばれた物理学者オッペンハイマー (1904-1967) の思想調査記録による審理劇を上梓した。これらの文学から戦後世代の平和主義者は、拒否する勇気、「いいえ」と言う勇気を得たのであった。

結語

ヒトラーのナチス=ドイツが降伏した後、ライプツィヒのヴァルドゥス・ネストラーとケムニッツのフリッツ・ミュラーは校長に任命された。彼らが校長になったということは、改革教育運動にあって解放を目指した構成部分が再生したという意味で、大きな意義のあることであった。ところが、多様な改革教育運動の中でも、彼らの指向した民主主義的でヒューマニズムあふれる部分は、いわゆる「労働者と農民の国」の「民主主義的な学校改革」をスローガンとした旧東ドイツ政権下にあっては何の意味も持たないことが悲劇的な形でまもなく明らかになった。とりわけ旧東ドイツでは改革教育運動は「晩期ブルジョア教育学」として、1948年から1950年の間に誹謗され排除された。ネストラーとミュラーの運命は、ソビエト占領地区で素早く実行された改革教育運動の排除とスターリニズム化された思想によってなされた初期東ドイツでの平和主義の弾圧という事態を象徴している。成立したばかりのドイツ連邦共和国に居住する二人(ネストラーとミュラー)の平和教育上の同志たちは、早々に政治上の異端者となった。西側諸国への接近と再軍備化を推進する旧西ドイツCDU/CSUの外交政策を背景として、ドイツの再統一の可能性は放擲され、1948年から1956年にかけてのコンラート・アデナウアー政権の政治方針に対する(平和主義的な)反対論が排除されてしまったのである。ドイツ問題では1946年、アメリカ政府が反共主義の原則にのっとり、ソビエトの対ドイツ政策を、全ドイツをソビエトの支配下におこうとする試みと見做した。ドイツをソビエトに渡してしまうか、それともドイツの分割を受け入れるか、という誤った選択肢を前にして、ドイツ問題を一挙し解決してしまうよりも、西ドイツの建設に力が注がれた。ソビエト

の独裁からヨーロッパを守ろうとする要求にもかかわらず、ヨーロッパ人の大多数は西ヨーロッパの同盟というかたちで、ヨーロッパの自立をうちたてる方向にむしろ傾いていた。しかし、統一ドイツの実現を志向したのは、ヨーロッパの「中立主義運動」、つまり「第三勢力運動」の一派である。この運動はマーシャル・プランを受け入れることはできたが、北大西洋条約機構や西ドイツの建国には納得できなかった。「中立主義運動」の牽引者らは1950年代初めに西ヨーロッパの再軍備に大反対した。このように、国際的平和協調グループの人達と同様、様々なグループが存在する。SPDのグスタフ・ハイネマン (Heinemann, Gustav 1899-1976)³³⁾を中心とするドイツの愛国主義的なプロテスタントたち、フランスの『ル・モンド (Le Monde)』誌や『オブザバテア (Observateur)』誌、ドイツの『シュピーゲル (Spiegel)』誌を中心とする懐疑的合理主義者たち、ソビエトに影響された「ストックホルム平和運動」に結集したロマン主義的な平和主義者たち、などだ。

これらのグループは広範な影響力はもってはいない。しかし、例えば国際協調協会は今日まで全キリスト教徒のなかで自己主張の強い一派である。良心を問い直し、教会と社会に積極的にかかわるキリスト教者が多くなってきているのは、この一派に10万人の会員がいるためである。平和運動や非暴力運動は大量殺戮兵器が備蓄される時代に、理性的で現実主義的な政治活動といえるであろう。

ハンブルクのヴィルヘルム・ラムスツスは戦後ドイツ平和協会のメンバーとして活発に活動した。同時にラムスツスは東西両ドイツの学校の民主化への支援に情熱を傾けた。彼は理想主義的立場から1950年代の東ドイツの学校を西ドイツの学校制度と比較し、東ドイツ側に新構想の学校としての価値を認めた。ラムスツスは西ドイツの学校を構造的、教育理論的な観点から見て時代遅れと考えていたのである。ラムスツスの平和教育上の活動と東ドイツの学校の発展への支援をたたえ、彼は旧東ドイツ・フンボルト大学の150年祭においてロベルト・アルトが学部長をつとめる教育学部

から名誉博士号を授与された。1962年、81歳のラムスツスは、私たち後継世代に向けて以下のような警告の言葉と義務を述べた。

今日、私の人生の晩年において、第三次世界大戦が起こらないことを、私は確信しております。あらゆる国々の何百万もの人々は、迫りくる危険に勇気をもって立ち向かわねばならないことを心得ております。日々大きくなっていく平和への戦いの力は、新たな世界大戦の劫火と、私たちの地上が再び—今度こそ誰も帰って来ないような—屠殺場となることを拒否するのです。³⁴⁾

戦争の危険から完全に解放されることを訴えたベルタ・フォン・ズットナーの言葉を現実化することが出来ないまま20世紀は歴史の中で遠ざかっていきつつある。今始まったばかりである21世紀でも依然として平和を脅かす危険は大きい。そう考えると、ここで提示した反戦文学は決して歴史的な関心だけではなく、現代的な意味をもつものと言えるだろう。

註

- 1) ズットナーはキンスキー伯爵家に生まれ、作家Arthur von Suttnerと1876年に結婚した。女性の立場から戦争反対を主張した小説“Die Waffen nieder” (1889) が全ヨーロッパに大きな反響を呼んだ。1891年には「オーストラリア平和の友の会」を創設。1905年にはノーベル平和賞受賞。主著は他に“Einsam und arm” (1893), “Das Machinennalter” (1889), “Der Kampf um die Vermeidung des Krieges” (1917) などがある。
- 2) ズットナーの明るすぎる楽観主義に対して、フランクフルト学派の主導者ホルクハイマー (Horkheimer, Max 1895-1973) は「歴史的進歩」概念を批判する立場から以下のような反対意見を表明している。歴史の中で最終的に残るのはいつも最悪のことなのだ、例えば、実現せず可能性のまま埋もれてしまったこと、実現しなかった幸福、殺人、人間の支配欲が好むもの、などである。その反対のものである平和は常に脅かされており、常に闘いの末に奪取されねばならない。結局は戦争とその繰り返しこそ、もっとも悲惨で野蛮で恐るべき危険を含んだものとして、回避しなければならない。というのも、

- 戦争は可能性を抹殺し、幸福を根本から震撼させ、卑劣なかたちで人間による人間の支配を生じさせるからである。戦争とは歴史の愚かな否定であり、個人と民族の権利の否定でもある。(Vgl. Horkheimer, Max/ Adorno, Theodor: Didaktik der Aufklärung. Philosophische Fragmente. Amsterdam 1947. [徳永恂訳『啓蒙の弁証法－哲学的断層－』岩波書店, 1990年])
- 3) ドイツの劇作家・詩人。表現主義を経た新即物主義的スタイルで現実に対する呵責なき批判と風刺を劇化した。1930年には共産党に入党し、1933年北欧を廻ってソ連に入る。後には北アメリカへ移住するも、戦後に帰国し、東ベルリンのドイツ劇場監督をつとめた。Spielen: "Trommeln in der Nacht" (1922: クライスト賞受賞), "Die Dreigroschenoper" (1928), "Frucht und Elend des Dritten Reiches" (1938: バリ初演), "Mutter Courage und ihre Kinder" (1941), "Herr Puntilia und sein Knecht" (1948); Gedichten: "Hauspostille" (1927)
- 4) ブレーデルはドイツの作家として知られているが、もとは造船所職工であり、後に共産主義労働者新聞の編集も勤める。ナチス時代には投獄されるが、プラハに亡命。さらにモスクワでブレヒトやフォイヒトヴァンガー (Feuchtwanger, Lion 1884-1958: ドイツの作家で、早くから革命詩を執筆、ヒトラー=ナチズムに最も勇敢に反抗した作家の一人と称される。1933年にフランスに亡命。1936年から37年にはモスクワに滞在するも、40年にはアメリカに在住した。Spiel: "Warren Hastings" [1916]. Romane: "Die hässliche Herzogen" [1923], "Jud Süß" [1925], "Erfolg" [1930], "Josephus-Trilogie. Der Jüdische Krieg" [1932], "Die Söhne" [1935], "Der Tage wird kommen" [1945], "Waffen für Amerika" [1947/48], "Goya" [1951]) 等と合流。1936年にはアメリカで文学雑誌 "Das Wort" を編集した。戦後はドイツに帰国し、旧東ベルリンを拠点に政治的活動に従事した。Romane: "Maschinenfabrik N. u. K." (1931), "Die Prüfung" (1935), "Verwandte und Bekannte" (1946)
- 5) Bredel, Willi: Ernst Thälmann. Führer seiner Klasse. Berlin S.150
- 6) "Das Menschenschlachthaus" という標語そのものは、ザック (Sack, Eduard 1831-1908) によって1878年に戦争を特徴付けるために用いられたが、その当時の状況、すなわち対仏戦もまたこの作品の基盤となっている。
- 7) アンドレイエフの初期の作品には庶民のささやかな生活、その喜びや悲しみを感動的に描き、ヒューマニスティックで手法もA.チェーホフやゴーリキーに近かった。しかし19-20世紀転換期の知識人として人生の不完全さを鋭く感じ、極端に個人主義的な方向へ進んだ結果、次第に厭世主義へと傾倒していく。1905年までは個人の悲劇を、それ以降は集団の悲劇を描写。1917年の十月革命直前までは「ルースカヤ・ヴォーリヤ」誌の有力な寄稿者であった。革命後はフィンランドに亡命し、その地で死亡した。
- 8) 史実としてのミュンツァーはルターと同時期に、千年王国の終末論を掲げ、諸侯に敵対する反乱農民を指導したが、その反乱は農民の完全な敗北に終わり、彼自身はヘッセン辺境伯フィリップにより処刑された。
- 9) パルピュスはフランス人民戦線の首唱者として知られる。平和運動のため週刊誌『ル・モンド』を創刊した。
- 10) ツヴァイクはユダヤ系馬具師の子として生まれる。初期の作品では繊細で音楽的な表現によって近代人の問題性や運命を扱い、1914年にはクライスト賞を受賞する。後に意識的に社会主義・シオン主義に接近し、ナチス=ドイツ政権確立後パレスティナに亡命 (1933年)。戦後1948年ベルリンに戻り、永年の眼疾のため失明に瀕しながらもドイツ民主化のために尽力した。Romane: "Novellen um Claudia" (1912), "Junge Frau von 1914" (1931), "Erziehung vor Verdun" (1935), "Einsetzung eines Königs" (1937)
- 11) 本名Gollssenu, Arnold Vieth von.レマルクよりも遙かに即物的写実主義をとり、より明確に思想的立場を打ち出した反戦小説『戦争』(1929年) および『戦後 (Nachkrieg)』(1930年) によってその名を知られる。スペイン内乱後メキシコに亡命するが、1947年帰国。Romane: "Adel in Untergang" (1946)
- 12) レマルクはドイツに生まれ、第一次世界大戦に従軍した。その後、小学校教師・商店員・雑誌記者等職を転々としたが、『西部戦線異常なし』によって一躍世界に喧伝される。ナチス=ドイツ政権成立直前の1932年スイスに脱出、のち1939年ニューヨークに移り、1947年には市民権を獲得した。
- 13) Auszug aus Lamszus, Wilhelm: Das Menschenschlachthaus. Bilder vom kommenden Krieg. Hamburg/ Berlin 1913, S.11f.
- 14) Wendel 1912, S.998
- 15) Protokoll 1913, S.19
- 16) Stapel 1913, S.12
- 17) Merkel, Johannes/ Richter, Dieter(Hrsg.): Das Menschenschlachthaus. Bilder vom kommenden Krieg. München 1980.
- 18) Lamszus 1962, S.158
- 19) Vgl. Hamburger Echo, Nr. 342 vom 11. Dezember 1925.
- 20) Lamszus 1929⁷²
- 21) ebenda.
- 22) ガウディヒ (Gaudig, Hugo 1860-1923) はライブツィヒを

活動基盤とした人物。1900年から没年までライプツィヒ第二女子高等学校長を勤める。彼は子どもの自由な自己活動、「自由な精神的自発活動」の支援のため、「芸術による芸術への教育」を提唱した。そのための作業学校がガウディッヒ・シューレである。

- 23) Nestler, Waldus: Giftgas über Deutschland. Berlin 1931, S.28
- 24) ebenda.
- 25) Auszug aus: Nestler 1931, S.28ff.
- 26) ebenda.
- 27) この講演内容は組合誌上にも掲載された。Vgl. Leipziger Lehrerzeitung 40, 1933, Beilage Nr. 4, S.125
- 28) この雑誌はオスイーツキーが編集に加わり、反戦運動を展開していた。
- 29) Lamszus 1962, S.159. なお、オスイーツキーは1933年獄死し、1935年にノーベル平和賞を追贈された。
- 30) Vgl. Pehnke, Andreas: "Ich gehöre in die Partei des Kindes!" Der Chemnitzer Sozial- und Reformpädagoge Fritz Müller (1887-1968) : In Diktaturen ausgegrenzt – in Demomkration vergessen und wiederentdeckt. Leipzig 2000.
- 31) Bestandteil des Alfred-Fichtner-Nachlasses (Schulmuseum in Bremen).
- 32) Lamszus, Wilhelm: Der große Totentanz. Hambrug 1946, S.100
- 33) ハイネマンは第一次アデナウアー政権時、再軍備政策に反対して内務大臣の職を辞した。後年連邦大統領に選出された（在位1969-1974年）。
- 34) Lamszus 1962, S.160

追記：本論はドイツ・グライフスヴァルト正教授ペーンケが2001年10月来日した際なされた広島大学での講演原稿（なお、この講演原稿はドイツでは以下に示すように改題され発表されている。Pehnke, A.: Zum Friedensengagement deutscher Reformpädagogen aus der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts. In: *Das Kind* (Halbjahresschrift für Montessori-Pädagogik) . Heft 31/2002, S. 81-115. - [Vortrag am 4. Oktober 2001 am Lehrstuhl Erziehungsphilosophie - Prof. Dr. Masaki Sakakoshi - der Universität Hiroshima]) を底本として、鳴門教育大学木内陽一ならびに論者が翻訳し、加筆、考察を加えたものである。

(2002年12月1日 受理)